に続いて2回目の受賞であった.

4）大阪製の歯ブラシは英仏製品に匹敵する品質を有し，盛んに輸出された.

5）楊枝の受賞は浜村亀蔵1名だけで，鰹の尾骨を廃物利用した妻楊枝で，褒状を受賞した.

19）お歯黒の里　香登をたずねて

広島県豊田郡本郷町　松　田　信　隆

過去において，全国的に広く行なわれていたお歯黒つけに際しては一般的に五倍子粉と鉄漿水とで塗布していたが，岡山県備前市香登（かがと）では，べんりおはぐろといわれる五倍子粉，ローハ，貝灰，3種調合による鉄漿水の不必要な，ただ，お歯黒筆にて水，あるいは湯に湿せばよい簡便品を主に製産販売していた.

言い伝えでは，香登お歯黒は鑑真和上により伝えられたとされているが，真偽はともかく，江戸時代には港屋高取，板屋竹内，かね屋竹原，新田屋甲矢，小姓屋一井の五業者によって，おたふく，やまとかね，ぬれつばめ，はやかね，ぬれからす，大黒かね，小姓屋かね，はやおはぐろなどの商品名で全国に出荷販売しており，おそらく全国一のお歯黒出産地であった.

香登の故島村豈氏は永年香登お歯黒について研究され，昭和57年10月香登お歯黒考として発表されたが，その後を受け地元の多くの人がグループにて確実な裏付けのある研究を進めている．しかし，明治6年岡山県令によって書類，器具，製品など資料一切を焼却処分されたため，それ以前のことについては言い伝えのみであり，それ以後の資料についても廃業時や，家の建て替え時などの廃棄などにより，現存する資料は香登全町内合せてもそれほど多くない.

そのなかで，高取家の売原薄と葉書115枚，封書7通の注文書に見られる販売量からは，昭和10年に至ってもまだかなりのお歯黒つけ人口を推定でき，そのうちの一つの仙台の川合商店では，大正15年にやまとかね21,000袋，昭和2年には49,500袋，3年70,000袋，4年34,800袋，17年51,000袋，18年72,380袋，19年24,600袋と19年間にほとんど注文量が減っていない．しかし，昭和22年，23年にはそれぞれ300袋ずつと激減し，香登お歯黒も高取，竹内両家の昭和24年の合議廃業によって消えたが，時が経て昭和34年再び川合商店は1,000袋の注文状と催促状をよこしたが，もとより香登ではそれに応じることは出来ず，川合商店の在庫分は昭和48年頃完売した.

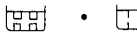
20）「甘粛彩陶」の鋸歯紋について　歯を洗う　中国考古学に一言あり

杉　本　茂　春

歯の初形

歯の最も古い字体は，殷墟出土の甲骨文で，カメの甲や牛の肩甲骨などに刻まれて発見された.

横一線を上唇，下に大きく張り広げた下唇に象形した箱囲いを描いて人の口を表し，そのなかに人のまえ歯を2本ずつならべる.

 ・ これは上下に複数の歯を描いて成人の口と歯をあらわす， これもまた上下合せて複数の歯と考えると壮年者の歯と言えるだろう.

上下に1本ずつの歯を描いた字は，歯が1本1本と抜け落ちて，まばらになった初老の歯と考えられる.

・ これに至っては，もはや，歯が全く抜けてしまった上あご，または下あごを示して，歯は抜けても，なお，かくしゃくとして談笑するしわ深い健康な老人，おきなの顔や口元が想像される.

能面の尉，トウトウタラリ，タラリラ……と舞う別格神能のおきなの面のあかるい表情を想像するのは日本人である.

は（歯）

歯という字は漢民族が創作した，レッキとした中国生れの象形文字で，「し」と発音する.

わが国では漢字が伝来する以前から，口中に生えている白い「歯」のことを「は」とよんでいた．「し」とは発音していなかったらしい．

朝鮮半島の百済を通じて伝わった漢字は，中国文化伝来の大きなにない手となって，歴史的な記録，古事記や日本書紀がつぎつぎと書きとめられたが，万葉集もそのなかのひとつで，万葉仮名とよばれるわが国独自の漢字つかいで著わされた有名な古典である．

能野川　石迹柏等　時歯成　吾者通　万世左右ニ（よしのがわ　いわとかしわと　ときわなす　われはよわむ　よろずよまでに）7巻 1134

住吉之　里行之鹿歯　春花乃　益希見　君相有香聞（すみのえの　さとゆきしかば　はるはなの　いやめづらしき　きみにあえるかも）10巻　1886

君之歯母　吾代毛所知哉　磐代乃　岡之草根乎　去来結手名（きみがよも　わがよもしるや　いわしろの　おかのくさねを　いざむすびてな）1巻　10

こんなふうに歯という漢字をうまくつかいこなしている．歯を口の中の「は」と理解してよみ，また，年歯，年齢のよ，またはよはいと理解して「よ」とよんでいたこともあきらかである．

「よ」とよむ歌首，「は」とよむ歌10首を数えることができた．

春には木の葉が芽吹いて盛んに茂り，秋になるとつぎつぎに枯れ葉となって散り去ってゆくさまに似ているところから，歯のことを木の葉の「は」と言うとむかし国学者の意見．

言語学的な，は（歯）のルーツはまだわかっていない．

歯（は）

説文の著者，許慎は人の口の正面観を箱型にえがき，その中ほどに仮りに横一線を設定して，その上側を上あごに見立てて，／＼，／＼とまえ歯を4本，また，その下側を下あごに見立てて，おなじく／＼，／＼とそれぞれまえ歯4本をえがいて歯の象形文字を構成し，もっとも写実的な歯の構図の上に，発音記号の「止」を置いて歯の字を完全無欠なものとした．そして，およそ歯の仲間に属するものは歯を偏として集められ，すでに4字があげられていた．しかし，当初は，まだ，まえ歯とおく歯の区別がはっきりしていなかった．

およそ，人の口中にあって正面から見える上下4本ずつ，あわせて4本の歯は，みた「虎牙」（トラの歯）の形に似ており，先端は薄く鋭いほこの刃先きのようになっていて，ものをかみきり，かじりとるのに適している．したがって，そのようにかじる作用を営むものを，みな「歯」と書き，「し」と発音することにした．

説文には，その後多くの解説書ができ，『説文解詁林』はそれらを集大成したものであろう．

『説文解字釈例』『説文解字義証』など，一字一字の解釈を広げていったが，歯についても，前歯と後牙，すなわち，まえ歯とおくの方にある牙とのあいだに，特に鋭く尖った歯が1本だけ突き出てみえる．しかも上下たがいちがいにかみ合っている，これを牙（ガ，きば）と言い，古文では，たがいちがいの 歯と書いた．また，この牙は1本だけ突き出ているから奇，二でわり切れないはんぱな数の牙と考えて，「猗」とも書かれた．おく歯はものをかみくだき，咀嚼（そしゃく）する働きがあるから牙というと説明してあった．

また，説文には，牙部に𤔲（く，むしくいば）を収録していて，歯部に齲（く，むしくいば，慣用で，う）を収録していないところからみても，歯と牙，切歯と臼歯，まえばとおくばの区別をはっきりと認識していなかったにちがいない．しかも，しかも，おくば（牙）がむしくいに犯されやすかったことをも言外に物語っていると言えよう．

しかしながら，『漢書』には虎に似た霊獣（騶）の記事がある．騶（すう）には騶牙とよぶひときわ鋭い牙があって，そのまえにもおくの方にも鋭

い牙はないとしているから，歯と牙と，特に鋭い牙（犬歯）とを識別していたことがわかる．

また，男児は生後8ヶ月，女児では生後7ヶ月で歯が生えはじめ，男児は8歳，女児は7歳で歯が生えかわりはじめるから，歯の生えはじめや歯の生えかわりで，どの子が年長で，どの子が年少かがわかる．したがって，歯を年歯，年齢とよみかえ，よみならわしていったと事情を説明している．

詩経には，鼠はいつでもいそがしそうに，ものをかじってばかりいて，ゆっくり咀嚼(そしゃく)あとからのかみもどしをしていない．だから，鼠は，かじる歯はあるが，ものをゆっくりとかむおくば（牙）はないにちがいない．こんなことがうたわれているから，歯はかじる，まえば，牙はかむ，おくばと理解していたことがわかるというものである．

牙

説文には，古い形式の歯字として， をかかげている． は下唇を張りひろげた形で，6本の鋭い歯がみえている．これはまえ歯4本に虎牙（犬歯，きば）をそえた形で，前から見える歯6本のことであろう．虎牙すなわち犬歯は雌にも雄にも生えている．しかし，犬歯以外の上下4本ずつ，合計8本のまえ歯のことを雄では牡歯（ぼし，雄の歯）という．交尾の際，雌のくび筋にかみつき，しがみついて交尾をはたす大事な歯だからである．雌は，交尾の際雄にかじりつくことはなく，雌の歯は食物を摂取する働きしかしないから，牝牙（ひんが，雌の歯）とよんで区別している．

このように，『説文解字釈例』にははっきりと解釈を加え，雄のまえ歯は交尾の際に雌のくび筋にしがみついて後背位で性交を果たす働きのあることを認識していた．雌は交尾に際して，決して雄にかじりついたり，しがみついたりしない．あくまで受動的で，雌の歯は餌（えさ）を食う働き以外のなにものでもないから，歯とはよばず，かむための牙とよんで区別していると説明している．

説文以前の古文に，すでにここまでの認識を持っていたことは，人の口歯を象形した殷人の甲骨文にとってかわって，獣歯を象形した周人は狩猟，遊牧を主とする西域の胡族であったことの傍証にもなるであろう．

しかし，時代がさがるにつれて，言わば農耕民族化に伴って牡歯本来の意義を見失い，壮歯すなわち三十歳前後のとしざかりの歯，強い，さかんな精力的な歯と理解を変えていいき，多くの解釈書が牡歯を壮歯にあらためているのは，まことに笑止の沙汰，「皆可笑也（みな，笑うべきなり）」と喝破し，また，正面に生えてくる一本の歯を単一にして，奇数だから犄とするというのも，実は，まえ歯がはじめて生えかわるとき，左右の一対2本がそろって生えてこず，まずはどちらかの一本がのぞきはじるところから，奇数なる牙として犄としたのであろう．

また，まえ歯，牡歯は交尾に際して，雄が雌の背にのしかかって，しっかりと雌の背にしがみつくための歯で，牡歯とよばれなければならないのに，門牙と記載する注釈書もあるが，これは歯が生えてくるという熟語，萌芽の芽と牙とが同音であるところから混同して，門牙と誤用されたのであって，まえ歯上下4本ずつ8本の歯，古文の6本の歯は，いずれも牡歯と言うべきであると慎重に見解を述べている．

今日の当用漢字表にはかむという漢字はなくなっている．かまないでもよい，軟らかい食べ物，べとべとして飲みこみやすい食べ物，例えば，子どもの好きなカレーライスやハンバーグ，ミルクとスープやデザートだけでこと足りるととでも言うのだろうか．かむという漢字は，ざっと数えて9字，『新字源』

咀……かむ，かみわける，かみくだく
咋……かむ，くう，くらう
咬……かむ，かじる
噍……かむ，かみこなす，くう
噉……かむ，一口にくいつくす，かじる
噬……かむ，くう，くらう
齟……かむ，くいちがう
嚼……かむ，かみくだく，かみしめる

齧……かむ，かじる，くいやぶる，くいこむ

など，かみ方にもいろいろあって，漢字成立の多様性から考えても，歯と牙の任務の相違やそれぞれの効用は大きかった．

中国考古学に一つの提言

人の口歯を象形して甲骨文を創造した殷人に対して，獣歯・獣口を象形して，古文，籀文を創造した西周，春秋，戦国時代の周人は，まさに狩猟，遊牧の胡人であったと言えそうである．

歯字のなりたちからみても，改めて民族学をひもとくまでもない事実と私は考える．

鼠という字は，かじる歯と爪とを持った動物で，古文の と とを備えた獣の象形，であるという．

ところで，中国考古学の記述と，『甘粛彩陶』の説明文に，一つの疑問を投じて，歯字論義を結びたい．

甘粛省蘭州の西南，黄河の支流洮河畔の遺跡を探険したアンダーソンは，羊山遺跡から多数の彩陶を発掘して，レポートを発表した．

さらに，その後，馬家窯，馬厰の住居跡からおびただしい彩陶の出土をみて，新石器時代（B.C. 10,000～4,000）（B.C. 10,000～1,000）にけんらんとはなひらいていた中国文化が世間の耳目を驚かせた．

アンダーソンのレポートにもあるように，羊山期彩陶には鋸歯状紋とよばれる特異な図柄が描かれている．しかも，おびただしい数であった．中国考古学専攻の釣田正哉氏の講演によると，アンダーソン・レポートの原文には dentate と報告された羊山期彩色土器の紋様を鋸歯紋と訳されたのであろうという．あい対称に向かいあった帯状鋸歯は黒彩が施され，その中央の空隙には紅彩舌状の小帯が描かれていることが多い．

青銅，鉄等の金属を知らなかった新石器時代の土器の表面に彩色された紋様を鋸歯状と命名するのはいかがなものであろうか．

レポート原文にある dentate は鋸歯状と訳するべきではなく，獣歯を象形して，古文の歯字を創作する素地を備えた狩猟系遊牧民族の所産になる獣歯状あるいは獣歯紋と訳出するほうがより真実に近いのではなかろうか．

当時，彩陶製作の理念は，猛獣，野獣を狩りすることのできた喜び，または牧畜の草食獣，羊，牛，馬，らくだ等の交尾繁殖を祝福する喜びの図柄，絵柄であったとみるべきであろう．少なくとも金属製のこぎりを知らなかった古代人の脳裡に浮かぶ彩陶紋様は金属製のこぎりではなかった．

早くから黄河流域に先住し，主として農耕に依存してきた殷人は，人の口歯を象形して甲骨文の歯を創作したのに対して，殷人にとってかわった周人は，中央アジア，トルキスタンに隣接する西域に蟠居して，狩猟，遊牧を主とした生活を営み，中原の沃野に新天地を求めて進出を図った民族であった．

先住，殷の文化を吸収しながら，古金文の文化を培った周人の思索のなかには，獣歯，牡歯，牝牙の認識がいろ濃く漂っていると言えそうである．

鋸歯紋と訳出されたアンダーソン・レポートの発想の原典が奈辺にあったかについては，改めて原文に当らなければならない．また，『甘粛彩陶』の図譜目録の鋸歯紋の意義は詳かでないが，タンポポの英語名は dandelion ライオンの歯のように鋭い欠刻を持った葉の形に因んでいるという．

私は，延々と歯の漢字学を展開したが，少なくとも，中国の西の辺境は，中央アジア，トルキスタン地方を通じて，ライオンと共棲共住していた狩猟民族，遊牧民族と同じか，非常によく似た発想をもって，獣および獣の歯をみていたと考えてきている．

大方のご批判が仰ぎたい所以である．

追　記

dentate を鋸歯状としたのは，おそらく，わが国が欧風近代化をいそいだ時代背景の中で生れた日本人の英和辞典であっただろう．

悠久，理想遠大な中国人が，その民族意識に立って dentate を漢訳したら，歯状欠刻，または古文歯字状とするのではなかろうか．

たったひとつの歯を洗って，表音文字を生み育てた人びとが dan (dam) の響きを性に結びつけて肌で感じ，一方では象形文字を創作した人びとが意識の中で練りあげた danta 娜哆（難多，那多，憚哆）紋を描いた．

私は，今やサンスクリットの古代性と，中国新石器時代の彩陶にみる美意識の似通いを東西文化の接点とみる境地に達している．

danta を歯と訳した三蔵法師玄奘は偉大な政治家，danta を 𠮷 ，歯ではなく，むしろ，娜哆と音写すべしと説いてゆずらなかった唐僧義浄は偉大な科学者であったと思う．

中国とインドを結んで，旅と訳経（文化交流）にあけくれた法顕・鳩摩羅什(クマラシューバ)・玄奘・義浄らの苦難と努力を忘れることができない．

21）日本衛生学会雑誌（明治37年会）創刊号から見た衛生学会の展望について

津島歯科総合研究所　○岡　田　治　夫

論説として，(1)「日本ノ室内空気ニ就テ」＝医学博士緒方正規，(2)「水ノ消毒」＝医学博士岡田国太郎，(3)「衣服材料ノ瓦斯吸収ニ就テ」＝医学博士横手千代之助，(4)「一種ノ発光性黴菌ニ就テ」＝医学士今村保の4題が紹介せられ，抄録としては，外国の部で「結核病伝染経路ニ就テ」ルールベシュなど21題あげられ，国内の部では，ウィダール氏凝集反応ト所謂浅川氏チフス診断液にて起る凝集反応の比較に就いて＝国光勉造氏など7題に及んでいる．

（会報）としては，会員の動静が報告されている．面白いことには，日本衛生学会の創立式及び発会記事や全員の宿所録が詳しく報告せられている．特に，目につくのは，東京市本郷区医科大学衛生学教室内の日本衛生学会の見出しで，日本衛生学会会員募集の広告を占有しており，その内容には，面白い面が沢山ある．「本会ノ目的トスル所ハ衛生学ノ進歩ヲ図ルニアリ，衛生学ノ目的ハ人類ノ健康ヲ保護増強シ疾病ノ予防撲滅ヲ図リ以テ天寿保全ノ祝福ヲ享有セシムルニアリ，是ヲ文明諸邦ニ視ルニ，斯学ノ応用ニヨル各種施設ノ完備ハ累歳罹病死亡数ノ減少ト共ニ国運ノ隆盛ヲ伴フヲ知ル，然則斯学ノ発達ハ又実ニ富強兵ノ因テ来ル源泉ナリト謂フベシ，翻テ本邦ノ実況ニ就テ考フルニ，我ガ季候，風土，衣食住，習慣，其他流行性諸病ノ発生等諸般ノ衛生的状勢ハ泰西諸邦ト大ニ其趣ヲ異ニスルモノアリ」云々と衛生学の国状により異なることを指摘している．また，本会の入会に際しては次の事を一般に規定している．

○「本会ノ規則概要ハ本誌表紙ノ裏面ニ載セルゴトクデアル．本籍，現住所，職務ナドヲ明記シテ一カ年分ノ会費金2円也ヲ添ヘ本会事務所ニ申込マルベシ．但シ紹介ナドノ手数ヲ要セズ」云々と規定している．

明治37年10月といえば，日露対戦して，我が国が大勝利を記録した年であり，衛生学会が6月12日発会式をあげた年である．これは，日本衛生学会の名によって，始めて第一歩を踏み出した年である．しかも，この学会は，東京市本郷区医科大学で孤々の声をあげた訳である．衛生学という学会名を最初に記録したのであり，その発会式（創立総会）の記事が奮っている．発会の辞を緒方正規氏が述べ，祝辞として，東京帝国大学名誉教授菊地大麓君が，続いて，中央衛生会長・陸軍医総監男爵石黒忠悳君・東京帝国大学医科大学長医学博士青山胤通君・就任挨拶＝評議員総代＝医学博士大沢謙一君が顔を並べている．

午後6時よりの懇親会には，緒方正規君が幕をあけて，祝辞として，学士会院会長＝文学博士加藤弘之君が述べている．日本衛生学会会則創立沿革について，委員今村保君が説明している．創立会計を詳しく報告し，更に議長を選び会則などを規定している．

明治37年10月調の会員宿所録の中に（いろは順）次の氏名が名をつらねている．

会員531名・市内177名・地方354名

○医科大学歯科教室＝石原久

○医科大学歯科教室＝八田桓